



情報環境 (IE) 領域における研究会活動

尾家祐二

九州工業大学情報工学部電子情報工学科/
情報環境領域委員長

間瀬健二

名古屋大学情報連携基盤センター/
情報環境領域財務委員

情報環境領域の概要

学会全体で 36 の研究会が 3 つの領域において活動を行っています。それらの領域の 1 つが情報環境領域です。情報環境領域は、現在 15 の研究会と 1 つの研究グループから成り立っています。それらの名称からも分かるように、情報基礎学、情報応用システム、さまざまなネットワークなどきわめて多様な分野を対象としています。この分野の進展は目覚しく、平成 4 年ではまだ 5 つの研究会であったのが、平成 9 年に 10 研究会に、そして平成 15 年には現在の 15 研究会に拡大しています。新たな研究の方向性を捉えた研究会の設立の提案も歓迎されます。そして、研究会登録者数は堅調に伸びて平成 17 年度から延べ 5,000 名になっており、この領域への関心の高さを示しています。

研究会活動

各研究会の活動内容は、情報処理学会の Web サイトからたどり、ご覧いただくことができます。研究会は、研究会運営委員会によって運営され、年間約 4, 5 回開催されています。それぞれの研究会においては、最新のトピックを捉えて特集を組み、特別講演なども企画されていますので、まずは Web サイトなどでご確認いただき、ぜひともご参加ください。また、研究会へのご登録を歓迎します。研究運営委員会は、定例の研究会のほか、広く参加を募るシンポジウムやワークショップなどの開催も企画し、さらには国際会議の運営も行っています。

各研究会における特徴的な活動内容の詳細については、今後の機会に譲るとして、ここでは、それらの一部を紹介

紹介します。

シンポジウム

1 つの研究会もしくは複数の研究会による合同開催が行われています。

- コンピュータセキュリティシンポジウム(CSS)
 - マルチメディア、分散、協調とモバイルシンポジウム(DICOMO)
 - インタラクション
 - 情報学シンポジウム
 - 画像符号化シンポジウム、映像メディア処理シンポジウム
 - 高度交通システム(ITS)シンポジウム
- 等。

上記シンポジウムは活発に行われ、インタラクションは 600 名前後、DICOMO2005 では 300 名以上、CSS2005 では 250 名以上の研究者が参加しています。また優秀な研究発表への表彰制度もあります。

1 つを例として取り上げます。インタラクションシンポジウム (<http://www.interaction-ipsj.org/>) は、人間社会に望ましいメディアや情報環境を実現するキーワードである「インタラクション」の研究発表、研究者の Cross Cultural なインタラクションの場として、1997 年にスタートしました。第 1 回はヒューマンインタフェース(HI)研究会の単独シンポジウムとして開催され、2006 年には第 10 回(現在は HI 研究会、グループウェアとネットワーク研究会、ユビキタスシステム研究会の共催)を数えています。その特徴は、この分野の国内シンポジウムとしてはごくまれなピアレビューによる査読体制と、インタラクティブ発表です。安西祐一郎現会長(元 HI 研究会主査)をプログラム委員長に迎えた第 1 回から、ピアレビューによる査読を行い(44% 採択率、34 本投稿中 15 本採録)、厳しい論文選考を行う国内シンポジウムの歴史が作られました。この歴史は現在も受け継がれ、2006 年の会議では 56 本の論文から 13 本を厳選し、23% の採択率というさらに狭き門になっています。しかしそれがあって、その狭き門を通すべく多数の論文投稿が集まり、良い論文・良い研究とは何かのひな形となり、それを聴講するために多くの参加者を集めているのだと思います。もう 1 つの特徴は、インタラクティブ発表で、ポスターと実機を持ち込んだデモ体験型発表の場を提供しています。モノではなく、コトの研究であるインタラクションは、体験・体感できる議論の場が重要です。2006 年のインタラクティブ発表は 2 日間で 81 件が展示発表(投稿 137 件)され、会場では熱気のある議論が繰り広げられました。そのほか、海外からの招待

講演や優秀論文・優秀発表の表彰，論文誌特集号との連携など，多彩なプログラムで学会の活性化に大きく貢献しています。

インタラクション 2006 から話題を 1 つ，2 つ提供しましょう。ベストペーパー賞は，ATR の吉田さんらの，力覚提示装置“Proactive Desk II”の論文が受賞しました。GUI 全盛の時代ですが，ポスト GUI を目指した研究が数多く発表されています。Tangible インタフェースをはじめ力覚提示はインタラクションにおける大事な要素ですが，力覚研究の道具はまさに手作り。この論文でもリニア誘導モータ (LIM) を使って非磁性導体を駆動する 2 自由度 LIM の原理を使って，理論 (シミュレーション) と実験により力覚インタフェースとして利用できるように実現しました。プレゼンテーションも，分かりやすく原理と実際を説明し，かつツカミどころを押さえて楽しくアピールするビデオなどもあり，学生の皆さんにはぜひお手本としてもらいたいと思った次第です。

C-Band, Embossed Touch, AfterTouch, moo-pong, Freqtric Drums, Roll Canvas, Ziplayer, BiblioRoll, ChaTEL, TABLETable, Photo Chat, uTopia, Drumix, Attractiblog, Picscope, GeoWalker, Hop Step Junk, etc. これらは何でしょう？ インタラクティブセッションのタイトルに現れたシステム (やアルゴリズム?) のニックネームの一部です。何となくイメージが浮かぶうまい名前もあるし，そうでないものもありますが，ネットワーク屋やコンピュータ屋が使う頭文字を並べたシステム名より，よほどセンスがいいです。タイトルの付け方も随分うまくなったと思います。なぜ英語名ばかり？ という問いは，読者に投げかけておきます (和名も時々出現します)。SIGGRAPH (Special Interest Group on Graphics and Interactive Techniques) や CHI (Computer Human Interaction) のような一流の国際会議に，研究の内容も発表の質もさらに近づきつつ，さらにユニークさを発揮していただければと思います。600 人規模の会議の運営は相当な労力です。10 年間の実行委員会とプログラム委員会の各位に敬意を表します。

国際会議

情報処理学会が IEEE Computer Society と初めて国際会議を共催しました。それが The International Symposium on Applications and the Internet (SAINT) です。この運営に主に携わる研究会は情報環境領域の高品質インターネット (QAI) 研究会です。この SAINT は情報処理学会の活動の国際化を目的として 2001 年に始められました。北米，アジア (現在までのところ日本) およびヨーロッパで開催しており，2002 年には奈良，2004 年は東京で開催

され，7 回目となる 2007 年は 1 月 15 ~ 19 日広島で行われます。最新のインターネット技術および応用技術に関する研究発表が行われます。シンポジウム本体のほかにはテーマを絞り込んだいくつかのワークショップも企画されます。

また，日本で行われる際には，(独) 情報通信研究機構主催の JGN シンポジウム，定例の高品質インターネット研究会も併設され，国内の関連する研究者，技術者の相互交流の促進も図られています。詳しくは，<http://infonet.cse.kyutech.ac.jp/conf/saint07/> をご参照ください。高品質インターネット研究会などを通じ，皆様も今後の SAINT の企画立案，運営へご参加ください。2008 年はヨーロッパにおいて開催される予定です。

活力ある活動に向けて

上記で紹介しました活動以外にも研究会運営委員会は，さまざまな活動を行っています。論文誌の特集号の企画もその 1 つです。たとえば「ブロードバンド・ユビキタス・ネットワークとその応用」特集，「情報社会の基礎を築く情報システム」特集などがあります。さらには，産学連携活動 (ITS 産業フォーラム，情報システムと社会環境研究会におけるチュートリアル等) にも取り組んでいます。これらの活動は，さまざまな立場の会員の方々の参加によるものです。そして，関連研究会の運営委員，さまざまな企画の実行委員等の献身的な貢献によって支えられています。

情報環境領域は，情報技術とその応用という広い分野を対象としており，さらなる発展が大いに期待されます。皆様のご参加，ご協力を得て，引き続き，活力ある活動を継続したいと考えております。ご支援のほど，よろしく願いいたします。

(平成 18 年 9 月 25 日受付)



尾家祐二 (正会員)

oie@cse.kyutech.ac.jp

1980 年京都大学大学院工学研究科数理工学専攻修了。1995 年奈良先端情報科学センター教授。1997 年より現職。同大ネットワークデザイン研究センター長。ネットワークアーキテクチャに関する研究に従事。本会フェロー。

間瀬健二 (正会員)

mase@nagoya-u.jp

1981 年名大大学院工学研究科情報工学専攻修士課程修了。同年 NTT 入社。1995 ~ 2002 年 (株) 国際電気通信基礎技術研究所研究室長。2002 年より名古屋大学情報連携基盤センター教授。博士 (工学)。